

『荒涼館』 デッドロック夫人の逃避と死の意味

大森 幸享

SYNOPSIS

In *Bleak House*, the plot of Lady Dedlock's secret centers on her inner struggles in which she felt despairing anguish of disguising her real feeling. The novel employs Esther's narrative and the third-person narrative, and these two narratives bring out a clue to understand Lady Dedlock's feeling and conscience. Therefore the central concern in the plot of Lady Dedlock's secret is to probe into the mind of her and see what her real feeling is. This paper focuses on Lady Dedlock's boredom as the cover of her real feeling, and examines the purport of her escape from the Dedlock family toward her death.

1. 「死ぬほど退屈」の根源

デッドロック夫人(Lady Dedlock)の秘密に関する物語は、大法官裁判所訴訟事件を描いた物語とともに『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)全体を二分している。これらふたつの物語は、夫人の娘エスタ(Esther)による手記の形をとった語りと、出来事のありのままを淡々と伝える三人称の語りとによって統御される。夫人に関する物語では、真実と偽装との狭間で苦悩する夫人の心理と行動が、徐々に彼女の素顔をあらわにし、物語に伏せられた謎を解く手がかりを与える。言い換えれば、自分らしく生きようとするデッドロック夫人がそれを抑圧しようとする社会や慣習に裁かれようとするとき、彼女が選んだ道が最終的におとずれる彼女の死とどのように結びついているのかという点が議論となる。つまり、夫人が犯した道徳的罪自体が問題視されるのではなく、罪を背負った人間がどのように生きていく

かに焦点が当てられる。

デッドロック夫人は若い頃にホードン(Hawdon)と婚約し結婚はしなかったが私生児を生んだという秘密を隠しもっている。夫人はホードンとの子どもを死産したと思い込んだままレスタ卿に求婚され結婚した。デッドロック夫人の過去に暗い影を落とすのは、彼女が当時の社会的・倫理的規範を超えたからであり、彼女自身や彼女を取り巻く情景描写が陰鬱なものを象徴する。“My Lady Dedlock’s ‘place’ has been extremely dreary.”、“The view from my Lady Dedlock’s own windows is alternately a lead-coloured view, and a view in Indian ink”。¹ また、夫人の肖像に差した光が庶子を暗示する盾形紋章の左帯（バンド・シニスタ）を示すように、彼女がデッドロック家の正統な位置を占めるに相応しくない女性であることをほのめかす（12章）。

しかしながら、デッドロック夫人の扱われ方に関して J. Hillis Miller が述べるように、自分の過ちを後悔するデッドロック夫人がホードンを思う気持ちは是認され、むしろ彼女の過ちを恥じ非難する彼女の姉バーバリ(Mrs. Barbary)は歪んだキリスト教精神をもつ堅物として否認される。² バーバリがデッドロック夫人のコントラストとして存在しながら、その過剰な禁欲と奉仕の精神がかえって非人間的な社会を作り上げるところに、夫人の生き方・あり方・存在の可能性が残されている。

冷淡な態度で退屈感をあらわにする夫人の姿が真実ではないことは、物語が進むにつれて徐々につまびらかとなる。上流社会で手に入れられるものはすべて手に入れた夫人ではあるが、それでも彼女の手が届かないものがある。デッドロック夫人はレスタ卿と結婚して以来、出産の秘密が発覚しないように内面や心の弱みを見せることなく、貴婦人然として振舞い続けることに神経をすり減らし、繰り返される形式的な社交が彼女を退屈な世界に縛りつける。夫人は四半世紀ほどその状態を続けてきたが、それが彼女に倦怠と精神的疲弊をもたらす。

My Lady Dedlock, having conquered *her* world, fell, not into the melting, but rather into the freezing mood. An exhausted composure, a worn-out placidity, an equanimity of fatigue not to be ruffled by interest or satisfaction, are the trophies of her victory. (10-11)

夫人は美貌、自尊心、野心、驕慢さによって押すに押されぬ社交界の華となるが、その華やかな世界で確固たる地位を築いても満足を得られない。ただ、彼女はスキャンダルを隠し持ちながら何事にも動揺することなく平静を装う態度を身につけ、准男爵夫人の身分を勝ち取った。それが“the trophies of her victory”といえよう。つまり、彼女が高慢な態度で貴婦人として生きることは、知られてはいけない部分を隠し守る行為であり、誇り高き貴婦人の装いの下には、悲しみに暮れる素顔がある。

デッドロック夫人の退屈感は、現在の状況とは対照的に、どうしても忘れることの出来ない別のもっと自分らしくいられる状況との対比から生じているといえる。³ 社交界で輝こうと、パリへ外遊しようと、そうした上流社会の暮らしは時間を埋め尽くしても、彼女の心の隙間を埋めることにも退屈の慰みにもならない。三人称の語りが“My Lady Dedlock (who is childless)” (9)と語った後に、屋敷の自室から眺めた、番人小屋の家庭的な一コマをじっと見つめる夫人の様子を描く(2章)。夫人は、小屋には明るい火と立ち上る煙、それから女に追いかけられ雨の外に飛び出した子どもが雨具に包まった男に走りよる光景を目にして不機嫌になる。この場面で夫人が感じた退屈感は、ある種の寂しさを防御しようとする心理から生じる感覚である。

2. ホードンへの隠された思い

2章で彼女が顧問弁護士タルキングホーン(Tulkinghorn)によって報告されるジャンダイス対ジャンダイス訴訟に関する法律文書のなかにホードンの筆跡を目にし、卒倒する場

面からも明らかなように、ホードンに関する話題が彼女にとって退屈感とは正反対のある種の事件となる。エスタが自分の娘であることを夫人がはじめて知るのは、29章でケンジ・アンド・カーボーイ法律事務所の下級弁護士ガッピー(Guppy)が、エスタの本名がエスタ・サマソンではなくエスタ・ホードンであると聞かされるときであることから、それまで夫人が心の内に隠し、公になることを避けていたことはホードンとの関係ということになる。⁴

ホードンは陸軍大尉であった。かつて彼の部下であったジョージ・ラウンスウェル(George Rouncewell)の証言によると、ホードンは若い頃は希望に燃えた美男子であった。また、クルック氏(Mr. Krook)の下宿で見つかったホードンの死体を検視した顔見知りの医者のお話によると、粗野な態度のなかにもどこか身分の立派な様子があったと印象を述べる。デッドロック夫人とホードンとの関係がどのように終わり、またなぜ終わったのかについての確かなことは語られない。とはいえ、ジョージの証言をもとに推測すると、ホードンは船から転落して溺死したために夫人はあきらめて彼との関係を終わりにしたと考えられる(21章)。苦楽をともにした側近のジョージですらホードンが溺死したものと信じていたのであるから、夫人がホードンを死んだものとあきらめたのは無理もない。ホードンが夫人の妊娠を認知していたか否か、彼が溺死したのはエスタが生まれる前か後か、これらの疑問も明示されることなく推測の域を出ない。確かなことは、夫人とホードンとの関係が愛の破局によって終止符が打たれたわけではないということである。

ところが、タルキングホーンによれば、ホードンは放蕩者で陸軍大尉としてなにひとつまともなことはできずに終わったとされるからである(40章)。確かに、タルキングホーンの話は夫人の秘密をほのめかした遠まわしな言い方であるから、すべてを事実どおりであると鵜呑みにすることは出来ないかもしれない。しかし、ホードンがスモールウィードから借金をしていた事実や、ホードンの生活を知るジョージの証言は、ホードンの生活が上手くいっていなかった証拠を固める。

“... he carried on heavily and went to ruin. I have been at his right hand many a day, when he was charging upon ruin full-gallop. I was with him, when he was sick and well, rich and poor. I laid this hand upon him, after he had run through everything and broken down everything beneath him – when he held a pistol to his head.” (275)

ホードンがピストル自殺しようとしたほどに生活に行き詰まり、苦しい行進を続けた末に破滅したというジョージの話は、デッドロック夫人がホードンとの結婚をあきらめなければならなかったもうひとつの理由を示唆する。さらに、ジョージはホードンが船から転落したことが故意だったのか事故だったのかを疑問のままに残し、自殺の可能性を漂わせる。

夫人にとってホードンとの関係を示すいかなる証拠も残っていることは許されない。ホードンの筆跡と思われる法律文書を目にしたときに夫人は驚きと心配の入り混じった強い感情を表に出さないように必死に平静を保とうとするも意識は朦朧としてしまう。このことから、夫人がこの文書を目にすることがいかに唐突な、思いもかけないことであるかが分かる。

失神したことがタルキングホーンに懸念をいだかせ、それ以後彼女の身边を詳しく調べ始める。そして、彼がその法律文書の代書人を職務上調べはじめたことで夫人に不安が募る。タルキングホーンがその代書人の下宿先に訪れた際、彼がその人物の死体の第一発見者となり、駆けつけた医者の話では、死後 3 時間経っていた。この時点ではまだその代書人がホードンであることは明らかにされず、身元はネーモー(Nemo)すなわち、「だれでもない人」という匿名だけが実証される。また、語り手が “the lonely figure on the bed, whose path in life has lain through five-and-forty years, lies there” (133) と述べることから、ホードンは享年 45 歳であると思われる。やがてタルキングホーンの報告によってその代書人が死んでいたと聞かされてはじめて夫人はホードンの死を知るのだが、死亡を知らされてもなお彼女の不

安は消えることはない。夫人はタルキングホーンにその人物の名前は何か、看護をした人はいたのか、他に手がかりはなかったのか尋ねる。もちろん夫人は本心からその人物の消息を知りたがっているのだが、彼女の本意はその死人がホードンという名の人物で夫人と何か関係があるという手がかりが発見されたのではないかとということを知りたがっている。もし看護人がいたならば証人として秘密が漏れる恐れがあり、ホードンと断定されるものが残っていれば夫人に危険が及ぶことが予想される。

こうした夫人の心配は、ホードンが埋葬されているとされる無縁墓地に彼女がこっそり見に行く行為にも窺われる。ホードンと思しき人物の死に伴い、道路清掃人ジョー(Joe)に死因審問がなされる。その審問のことが新聞に載っていることを知った夫人は、暗くなってから女中の姿に変装してこっそり出かけ、道路清掃をしているジョーを呼び、新聞に書かれてあったその死人に関する場所を案内させる。彼女が案内させた場所はホードンが法律文書の代書を頼まれた場所、彼が住んでいた部屋、それから彼が埋葬されている墓地である。夫人はホードンが足跡を残しているであろう場所を見て回る目的があったと考えられるが、それは単に忘れえぬホードンへの思いからそうしただけではなく、彼の身元を証明するものの存在を危惧したためであるとも取れる。とくに埋葬場所にはひょっとすると彼の名前が明記されているものが残っている恐れがあった。

つぎに夫人が心配したホードンの証拠物品はガッピーが入手しようとした手紙の束である。エスタに求婚するガッピーは彼女に取り入るために彼女の出生の秘密、つまりエスタがデッドロック夫人と血縁関係にあるかどうかを独自に調べるうち、デッドロック夫人と接触するようになる。彼はエスタの生まれと育ちの謎を解明する手がかりの一つとしてその手紙の束をじきに入手できるので持参すると夫人に言う。つまり、その証拠品によってエスタ、バーバリ、ホードン、そしてデッドロック夫人とのつながりを調べる。それに対して、夫人は “You may bring the letters, . . . if you choose.” (373) とそっけなく応え、ガッピーに乗り気がないと不審に思われると、“You may bring the letters, . . . if you please.” (373) と

少し丁寧に言い直す。夫人は本来ホードンが残した手紙が発見されては都合が悪いが、秘密保持を貫けばかえって疑いを招くと考える。ガッピーの口からエスタ・サマソンやミス・バーバリ、それからホードンの名がでてきて彼らとの関係性を尋ねられても、夫人は頑なに平静を装いながら関与を否定し続ける。33章でガッピーが入手しようとした手紙の束がその所有者クルックの死にともない入手不可能になったと知らされたとき夫人が安堵することからも、いかに彼女がホードンを知る手がかりの発見と彼との関係の露呈を恐れていたかが分かる。⁵ また、エスタが自分とホードンとの子どもであるを知ったときの夫人の一瞬の動きの描写は、映画のカット割りのように多角的に彼女の表情の細かな変化をとらえる。

Mr Guppy stares. Lady Dedlock sits before him, looking him through, with the same dark shade upon her face, in the same attitude even to the holding of the screen, with her lips a little apart, her brow a little contracted, but, for the moment, dead. He sees her consciousness return, sees a tremor pass across her frame like a ripple over water, sees her lips shake, sees her compose them by a great effort, sees her force herself back to the knowledge of his presence, and of what he has said. All this so quickly, that her exclamation and her dead condition seem to have passed away like the features of those long-preserved dead bodies sometimes opened up in tombs, which, struck by the air like lightning, vanish in a breath. (371)

思いもかけない真実の露見に衝撃を受け絶句する夫人の心理は、彼女の顔色の変化や唇の震えなどによって、その心の底で蠢く制御しがたい苦悶を実写する。夫人がガッピーの報告に対し訴えるように ‘And what is *that* to me?’ (372) あるいは ‘Still I ask you, what is this to me?’ (372) と繰り返す態度には、ガッピーの口から発せられる決定的な一撃を促すかのような言葉にも取れる。

3. 夫人の逃避と死の意義

デッドロック夫人がレスタ卿のもとを去り、死を決意する引き金となったのは、タルキングホーン殺害の容疑がかけられ、彼女の秘密がレスタ卿の知るところとなると思い、“All is broken down” (687) と悟ったときであることに着目したい。窮地に追い込まれた夫人は、これまでどおり誉れ高き貴婦人として生きていくという選択肢は絶たれる。これまでどおり生きていくことが不可能となり、彼女の心に忍び寄る恐怖と不吉な影から逃れるためには、彼女に残された選択肢はひとつしかない。

Thus, a terrible impression steals upon and overshadows her, that from the pursuer, living or dead—obdurate and imperturbable before her in his well-remembered shape, or not more obdurate or imperturbable in his coffin-bed, —there is no escape but in death. Hunted, she flies. The complication of her shame, her dread, remorse, and misery, overwhelms her at its height; and even her strength of self-reliance is overturned and whirled away, like a leaf before a mighty wind. (688)

夫人がエスタに真実の告白をし、その罪の赦しを請う場面ではまだレスタ卿のもとを去るつもりも、死ぬつもりもなかった。夫人がエスタに話すように、夫人はこれまでどおり社交界の華として生きていくつもりであると決心する。そのことが夫人にとって死ぬほど退屈で精神的に苦痛なことであるにせよ、彼女は上流社会という自分にとって偽りの世界を捨てるという選択はしない。“I dread one person very much.” (464) と言って夫人が警戒するタルキングホーンの死が、彼女に安心ではなく、さらなる逃れられない恐怖をもたらし、夫人に死を現実のものとして実感させる。

まず、彼女の逃避行為を事の結果として考えた場合、その原因は彼女がこれまで隠し続けてきた秘密が露見しレスタ卿の知るところとなった恥辱である。事実、ガッピーによって夫人の秘密がレスタ卿に密告されたと知らされたときにはすでに、スモールウィードとチャドバンド夫人(Mrs. Chadband)がデッドロック夫人の秘密を種にレスタ卿を恐喝していた(54章)。夫人は最も恐れていた一撃によって半ば精神的混乱に陥り、恥と恐怖と悔恨と悲歎によって打ちのめされ、彼女の強い自負心すらも崩れ去ろうとする。夫人がレスタ卿に残した置手紙には、強い自負心で絶望感に耐える夫人の姿がある。

‘I have no home left. I will encumber you no more. May you, in your just resentment, be able to forget the unworthy woman on whom you have wasted a most generous devotion – who avoids you, only with a deeper shame than that with which she hurries from herself – and who writes this last adieu!’ (688)

夫人はこれまで隠し続けてきた過去の罪に対する恥辱から逃れようとする。この暇乞いの手紙の中で夫人はタルキングホーン殺害については身の潔白を弁解するも、過去の秘密については否定しない。レスタ卿の寛大な心で許されようとも、デッドロック家に迷惑をかけ恥をぬってはいけないという夫人の義務感が“a most generous devotion”の部分に強く表されている。

つぎに、夫人はレスタ卿の寛大さを踏みにじり、エスタに不幸な運命を背負わせた良心の呵責を抱く。エスタ宛てに書き残した夫人の手紙に彼女が死のうとする理由が述べられている。

‘Cold, wet, and fatigue, are sufficient causes for my being found dead; but I shall die of others, though I suffer from these. It was right that all that had sustained me should give away at once,

and that I should die of terror and my conscience.’ (732)

死を決意して一路死へ向かっていく夫人がエスタに手紙を書く必要がないことを考えると、これはエスタにあてた手紙であるとはいえ、実質的に作者による夫人の死の意味の説明である。この手紙は彼女が逃走中にレンガ職人の家に立ち寄った目的の解説と、彼女の逃走を手助けしたレンガ職人の妻ジェニー(Jenny)の弁護、それから自分が死ぬ理由の説明となっている。夫人が死ぬのは病のためではなく恐れと良心の呵責によると断るところに、罪の重さに慄き苦悩する偽らざる夫人の感情が現れている。

4. 結 論

デッドロック夫人は自分の罪を後悔しその罰を当然のものとして背負いながらも、ホードンに耽溺することなく、レスタ卿やエスタの社会的体面に及ぼす影響に配慮する点で、墮落した女性として非難されない。デッドロック家の歴史に汚点を残した夫人は、デッドロック家の親族として歴代の先祖とともに葬られる。レスタ卿もときおりその霊廟をおとずれることから、夫人が赦された人間であることが分かる。Robert Higbie は、ディケンズ後期の作品の結末は現実を超越した理想的な世界に求める妥協であると考えた上で、『荒涼館』の結末には理想と現実が混在するとはいえ、不幸な結末とはならず、そこでは理想と現実との軋轢を解決しようとしていると述べている。⁶ 夫人の過去の罪が若気の至りであり運命のいたずらであることは否定できず、社会的には赦されないとしても、夫人の過去の過ちは人間として必ずしも罪悪ではないのだと作者は解決を与えている。

貴婦人として生きることが夫人の社会的対面であり、彼女の冷淡で驕慢な態度は、内に隠された耐え難い寂しさや孤独を心理的に紛らわす行為であったと言えよう。彼女が実の娘だけに真実を告白し、数通の手紙の中で本心を語るのは、誰かに自分を理解してもらい

たいという人間自然の情である。夫人がエスタへの手紙で語るように、夫人はたったひとりで苦しみ、身近にいる誰からも愛してはもらえず、救いの手も差し伸べられることはない。その耐え難い寂しさに衝き動かされて、親密な人との充実した関係を胸に思い描いたとき、夫人はホードンとの関係に拠り所を見出し、レスタ卿夫人としては満たされなかった十分な情緒の安定を取り戻した。デッドロック夫人はレスタ卿夫人という偽りの自分を捨てることで、それまで我が身を縛り苦しめ続けてきた罪の意識から解放され、安らかで自由な悟りの境地に達する。未来に絶望した夫人がひとりの人間として新たな生き方を求める姿こそ、自然的感情を取り戻したデッドロック夫人の姿にほかならない。

注

- 1 Andrew Sanders, ed., Charles Dickens, *Bleak House* (London: J. M. Dent, 1994) 9. 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に示す。
- 2 J. Hillis Miller. "Interpretation in *Bleak House*." *Bleak House: Charles Dickens*. (New York: Macmillan Press, 1998) 39.
- 3 Bertrand Russell がその著書 *The Conquest of Happiness* の 'Boredom and Excitement' の項で指摘している退屈の本質的要素は、デッドロック夫人の倦怠感を考える上で非常に興味深い。

'One of the essentials of boredom consists in the contrast between present circumstances and some other more agreeable circumstances which force themselves irresistibly upon the imagination. It is also one of the essentials of boredom that one's faculties must not be fully occupied. . . . Boredom is essentially a thwarted desire for events, not necessarily pleasant ones, but just occurrences such as will enable the victim of ennui to know one day from another. The opposite of boredom, in a word, is not pleasure, but excitement.' (Bertrand Russell. *The Conquest of Happiness*. London: Unwin Books, 1965) 37.

- 4 デッドロック夫人はエスタを出産後、姉のバーバリから死産であると聞かされたため、それ以後自分の娘は死んだものと信じてきた。エスタが自分の娘であることを夫人が知るの、29章でガッピーがエスタの本名はエスタ・サマソンではなくエスタ・ホードンであると聞かされる時である。

' . . . and she then told her that the little girl's real name was not Esther Summerson, but Esther Hawdon.' (371)

‘O my child, my child! Not dead in the first hours of her life, as my cruel sister told me; but sternly nurtured by her, after she had renounced me and my name! O my child, O my child!’ (373)

また、36章のエスタの語りでは、デッドロック夫人が自分の娘が生きていることをはじめて知ったのは、エスタが天然痘の病に倒れているときであるとエスタは語る。

My unhappy mother told me that in my illness she had been nearly frantic. She had but then known that her child was living. She could not have suspected me to be that child before. (464)

5 その手紙の束は後にスモールウィード(Smallweed)の証言でデッドロック夫人がホードンに書き送った手紙であることが分かり、夫人のファーストネーム「オノリア」(Honorina)と署名されていることが判明する(54章)。

6 Robert Higbie. *Dickens and Imagination*. (Gainesville: University Press of Florida, 1998) 118.

参考文献

Ayres, Brenda. *Dissenting women in Dickens' novels: the subversion of domestic Ideology*.

Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1998.

Harvey, John. *Victorian Novelists and Their Illustrators*. New York: New York University

Press, 1971.

Higbie, Robert. *Dickens and Imagination*. Gainesville: University Press of Florida, 1998.

Jordan, John O. ed. *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge

University Press, 2001.

Korg, Jacob, ed. *Twentieth century Interpretations of Bleak House: a collection of critical*

essays. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1968.

Leavis, F. R., Q. D. Leavis. *Dickens the Novelist*. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.

Russell, Bertrand. *The Conquest of Happiness*. London: Unwin Books, 1965.

Shatto, Susan. *The Companion to Bleak House*. London: Unwin Hyman, 1988.

Steig, Michael. *Dickens and Phiz*. Bloomington: Indiana University Press, 1978.

Tambling, Jeremy ed. *Bleak House: Charles Dickens*. New York: Macmillan Press, 1998.

西條隆雄 『ディケンズの文学—小説と社会—』 東京：英宝社，1998年．

西條隆雄編 『ヴィクトリア朝小説と犯罪』 東京：音羽書房鶴見書店，2002年．

新野緑 『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』 東京：研究社，2002年．

松村昌家 『ディケンズの小説とその時代』 東京：研究社，1989年．

出典：『甲南英文学』第19号（甲南英文学会，2004）87-96.